

が示唆された。

### 34. 肺癌に伴う癌性胸膜炎の臨床的検討

大分医大第2内科 永井寛之  
黒田芳信, 後藤陽一郎  
重野秀明, 後藤 純, 田代隆良  
那須 勝

当科にて経験した肺癌に伴う癌性胸膜炎症例39例(扁平上皮癌10例, 腺癌16例, 小細胞癌11例, 大細胞癌1例, 腺扁平上皮癌1例)につき臨床的検討を行った。局所療法・全身療法にて癌性胸水に治療効果の認められた症例は, 無効例に比して有意に予後が延長していた。

### 35. 肺小細胞癌の診断と治療, 予後に関する検討

長崎市立市民病院内科

福田康弘, 中野正心  
同 放射線科 藤本 進  
過去14年間に経験した肺小細胞癌58例について, 化学療法を中心に臨床的検討を行った。最近のPVD, CAVを含む化学療法と胸部照射によって奏効率は向上したが, 生存期間では向上がみられていない。

### 36. 乳頭影と紛らわしかった小型小細胞癌の1例

国療熊本南病院内科 仲田広敬  
手島安廣, 平岡武典  
同 外科 武藤 真

肺癌検診で乳頭陰影と紛らわしかった8mm(発見時)の腫瘤で, 手術標本で小細胞癌の診断がついた一例を経験した。肺内および縦隔転移がなく, 化学療法2クールを行ったが, 全経過, 約1年半で亡くなった症例で, 種々の反省を含めて発表した。

### 37. 術後に胃転移が発見された肺小細胞癌の1例

大分医大第3内科 木村 孝  
松本哲郎, 水城まさみ

鬼塚 徹, 津田富康  
同 第2外科 近間英樹  
田中康一

症例は71歳男性。平成1年9月22日肺腫瘍にて左肺切除術を施行した。病理組織は小細胞癌, intermediate type。術後のステージは, T<sub>2</sub>N<sub>0</sub>M<sub>0</sub> Stage I。平成2年3月上腹部不快感にて胃内視鏡施行。胃体上部後壁及び前庭部後壁にかけて数ヶ所の潰瘍を伴う隆起性病変を認め生検にて小細胞癌と診断された。入院後の検査にて肝転移及び脳転移を認め, 化学療法を2クール行い腫瘍の縮小を見た。術後に肺癌の胃転移を発見する例は極めて稀である。

### 38. 肺小細胞癌の長期生存例の検討

国療熊本南病院内科 手島安廣  
藤井一彦, 仲田広敬, 島津和泰  
平岡武典, 弘 雍正

同 外科 松枝和人, 武藤 真  
安尾博之  
同 放射線科 大蔵正則  
肺小細胞癌(1979年~1988年)25例の長期予後の検討で2年生存率28%, 5年生存率17%であった。また, 長期予後は病期よりPS及び化学療法の効果に影響を受けるようである。

### 39. 肺小細胞癌剖検例33例の検討

長崎市立市民病院内科

福田康弘, 石田一雄, 田畑 聡  
坂井秀章, 福田正明, 伊藤直美  
中野正心  
同 病理 重松和人

当院で経験した肺小細胞癌剖検例33例について検討を行った。肝, 肺, 副腎, 骨, 脾, 骨髄, 脳などに多かった。死因としては, 癌関連のものが多かったが, 治療関連によるものも見られた。

### 40. 当教室における転移性肺腫瘍の臨床的検討

産業医大第2外科 平尾大吾  
白石武史, 中西良一  
下川路正健, 白日高歩  
同 呼吸器科 城戸優光

1979年以降の11年間に24例の転移性肺腫瘍を経験し, 18例に外科的切除を施行した。これら18例について, 転移巣の組織学的形態を特に腫瘍と正常肺の境界に注目して, Invasive typeとNon-invasive typeに分類しその予後を比較し, 有意差を得た。これら予後に係わる因子について検討し, さらに手術術式について検討を加えた。

### 41. 左大腿肉腫の肺転移の1成人例

長崎県立島原温泉病院内科

田中研一, 福島喜代康  
山崎美緑, 山田由美子  
田中俊郎, 岡本純忠, 蓮本正詞  
長崎大検査部病理 津田暢夫  
症例は57歳, 男性。左大腿腫瘤と胸部X線上多発結節影で入院となった。大腿腫瘤は生検で横紋筋肉腫疑いの診断で, TBLB, brushingでは大腿腫瘍と同様の細胞を認め, 大腿肉腫の肺転移と診断した。剖検の組織像は, 紡錘形の細胞と多形性に富む多核の巨細胞の混在を認め, 酸素抗体法ではPAS, Myoglobin lesmin陽性で多形型横紋筋肉腫と診断した。今回, 我々は, 多形型横紋筋肉腫の肺転移例を経験したのでここに報告する。

### 42. 肺癌切除例におけるpm症例の検討

長崎市民病院外科 中田剛弘  
林田政義, 宮田昭海  
同 内科 中野正心, 伊藤直美  
福田政明  
IV期肺癌は, 外科治療の適応